学校NOW! 学校歳時記

部活動をどう改善するか

教育創造研究センター所長　髙階（たかしな）　玲治（れいじ）

1　部活動の教員多忙化の問題

「部活がブラックすぎて倒れそう―教師に部活の顧問をする・しないの選択権をください。」という訴えが署名サイトから一昨年末発信された。この若手グループの声はたちまち広まり，３か月足らずで２万人以上の署名が集まったという。この署名は文科省にも提出された。

周知のように，我が国の中学校教員は他国の教員に比べて著しく勤務時間が長いことが明らかになっている。OECD の調査であるが，我が国の教員の勤務時間は週 53.9 時間で，各国の平均は 38.3 時間であった。

その内実は,「指導（授業）に使った時間」は 17.7 時間で，平均の 19.3 時間よりも少ない。何が多いかと言えば「課外活動（部活動）の時間」で 7.7 時間（平均 2.1 時間）であった。部活動にかかわる時間が圧倒的に多いという実態である。

このような実態から文科省は昨年６月に『学校規模における適正化に向けて』を公表し，特に部活動については「教員の部活動における負担を大胆に軽減する」としている。また，10 月の教育再生実行会議では安倍首相が教員の長時間労働が顕在化しているとして,「教員のみが部活動を担うのは限界があり，今の部活の在り方を見直す必要がある」とする見解を示したという。

2　部活動見直しの背景

これまでも部活動指導などの見直しの考えはみられた。例えば平成９年には，中学校の運動部は週当たり２日以上（高校は１日以上）の休業日を設定することや，土・日曜の大会参加の場合は休業日を他の曜日に設けるなどである。また，部活の練習は平日の場合，長くても２～３時間以内などがみられる。

なお，部活顧問は校長が校務分掌として任命できる。ただし，時間外勤務は命じることができない。時間外勤務は生徒実習，学校行事，職員会議，非常災害の４項目のみである。

このような規定は一応あるが，遵守されているとは言えないのが実態である。結局，部活担当者任せになっている場合も多いであろう。実は，こうした動きに対して更なる見直しの動きが生じているのではないか。

部活動への不満が教員から多く寄せられるようになった背景には，勤務時間が長いという理由以外にも多様な課題がありそうである。

一つの大きな理由は，部活指導のシステムの問題があると考える。部活動は学習指導要領の総則に「学校教育の一環として，教育課程との関連が図られるよう留意すること」と書かれているが，基本的には生徒が自主的・自発的に参加するものである。それが全員参加の形をとっている学校が少なくない。

それが当然と受け止められている学校風土がある。特に運動部活動は従来から「より高い水準の技能や記録に挑戦する中で，スポーツの楽しさや喜びを味わい，学校生活に豊かさをもたらす意義を有している」（文科省平成９年）と極めて肯定的な考えがみられた。

それに対して疑問を持つ教員が現れ始めているのではないか。約66％の中学校で全教員が顧問になることを原則としているというが，運動部顧問のうち競技経験のない顧問が46％もいるという。

次の大きな理由は，最近の教員は部活動優先への疑問から多忙化解消に関心が向き始めているのではないかと考える。昨年6月の文科省提案も「教員が放課後指導に時間を過度に費やすと，授業準備，生徒の個別相談や家庭訪問，外部専門家や関係機関との連携に当たる上で支障になると懸念される」と述べている。今後は部活重視よりも教材研究等に時間をさきたいと考える教員が増加するのではないか。アクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメントなど，やりたいし，やる必要がある課題が増加している。

３　部活動は改善可能か

これまで運動部活動は特に「生徒の将来に役立つ」とされてきた。そう考える教員や生徒，保護者の考えは多かった。確かに部活動の影響は大きいものがある。

私どもが大学生に行った中学・高校時代の特別活動・部活動の振り返り調査（2011）で「どのような力が身についたか」を聞くものがあったが，その結果は驚くほど高かった。

特活全体では「人間関係を築く力」中学92.0％（高校91.1％　以下同じ），「コミュニケーション力」90.9％（88.2％），「チームワークなど連帯感」90.2％（90.4％）であった。

部活動は「自分のやりたいことを選ぶことができた（自発性）」87.0％（86.0％），「自分から進んで一生懸命努力することが多かった（努力）」85.6％（81.5％），「先輩・後輩などの人間関係について多く学んだ（人間関係形成）」80.0％（78.5％），など高い結果であった。この他，「達成意欲」「自主性」「チームワーク力」「連帯感」「協力性」「責任感」の順であったが，すべてほぼ70％を超えていた。

この数値は，全体的には学校行事としての文化・スポーツ活動の取組や，学級・ホームルーム活動，生徒会活動よりもかなり高かった。部活は生徒にとって意義のある活動であることは確かである。

しかし，今回の文科省提案は生徒の部活についてかなり懸念を持っているようにみえる。「教員の勤務負担の軽減のみならず，生徒の多様な体験を充実させ，健全な成長の促進を促す観点からも，休養日の設定の徹底をはじめ，部活動の大胆な見直しを行い，適正化を推進する。」と書かれている。

実は全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査は多面的に考察できる優れたデータであるが，その中の調査として「普段，何時に就寝しているか」の問いに「12時以降」が21.5％もみられる。「テレビ等」の視聴時間や「テレビゲーム」や「スマホ，メール」などに費やす時間は，それぞれ３時間以上が24.1％，18.9％，16.6％である。同じ生徒が関わっているとすれば，その影響は甚大であろう。

また，授業での学習態度に関する調査項目を見ても，多くの課題がみられる。つまり，大切なことは生徒個々の生活・学習管理が正しく行われているかどうかの学校の把握が重要であって，その観点を含めて自校の生徒の実態を把握し，部活動の指導につなげる必要があるということである。

部活動の指導は各学校の裁量に任されることが多い。生徒や教職員個々の考え方や保護者の意向などを十分聴取して，従来の部活観を超えた，自校にとって望ましい部活動の在り方をそれぞれの学校が考えるべきではないか。今はその時期に来ていると考える。

学校NOW! 笑顔をとりもどせ

子どもの居場所づくり
～つながるとは～

大網白里市立季美の森小学校教諭　宮田（みやた）　利絵（りえ）

1　はじめに

本校勤務５年目，うち４年間，保健室登校の児童と関わってきた経験から，それらの児童が安心して登校してこられる居場所づくりについて考えてみた。

2　つながる・つなげるということ

何を差し置いても，最も大切なことは，本人と担任がつながるということだ。これなくしては一歩も前に進めない。

⑴保護者とつながる

保護者も葛藤を抱えている。担任としてまずは保護者の心の重荷を少しでも軽くすることを心掛ける。そのために，現状をマイナスに捉えるのではなく，長い人生で本人にとって今，それが必要なのだということを理解してもらい，担任として本人に寄り添い続ける気持ちを伝え続け，安心してもらう。

⑵教師間のつながり

チームをつくり，ケース会議を持つ。担任，養護教諭，教務，特別支援コーディネーターなどで，その時の状況に応じた役割分担を行う。本児の居場所が保健室だけにならないように，校内における動線をできるだけ大きく作れるよう大まかなプランを会議で確認する。あとは日々，担任が本人に自己決定させながら当日の動きを確認する。本校では毎月の職員会議の後，生徒指導，特別支援教育等の面から気になる児童について，情報を共有し合う時間を設けているので，そこで，「最近調子がいいので積極的に声をかけてあげてほしい」等，周囲の先生方に協力を呼びかける。

⑶専門機関とのつながり

該当児童がすでに病院等に通院している場合はできるだけ早い段階で主治医と会う。（勿論，保護者を通じて）また，無料で相談にのってくれる地域の相談センターへの通所を勧めたこともある。センターのカウンセラーに前もって本人の状況や学校としての思いを伝えておくことで，事がスムースに進んだ。専門機関，学校，保護者が情報を共有でき，一貫した態度で児童に接することができた。現在は本校のスクールカウンセラーや訪問相談員の先生とも連携しながら，該当児童の支援を行っている。

⑷児童同士をつなげる

本人の親しい児童にパイプ役になってもらう。休み時間に遊びに誘ったり，保健室への届け物や連絡を複数の児童に行ってもらう。学級の掲示物を本人につくってもらって飾ったり，本人の負担にならない加減をおさえながら，細く，長くつながる関係を構築する。学級では折に触れて本人の話をし，理解を求め，また感謝も伝える。同じクラスの仲間なのだということを伝え続ける。

3　おわりに

以前，始業式の時に，体育館の隅で養護教諭と担任発表を聞いている児童に，発表後すぐに担任からその子への手紙を渡してもらったこともある。縁があって受け持つクラスの子は，全員，無条件で愛しいものだ。子どもたちの幸せのために精一杯のことをしたいと思っている。何があっても味方で居続ける覚悟を持って，その子の気持ちに寄り添い続けること。すぐに花開かなくとも，いつか，その子が踏み出す一歩の糧になる時がくるはずだから。

平成２８年度全国学力・学習状況調査　本県の結果について

県総合教育センター学力調査部

全国学力・学習状況調査について

平成 28 年度全国学力･学習状況調査は，４月 19 日（火）に，全国の小学校第６学年，義務教育学校前期課程第６学年，特別支援学校小学部第６学年と，中学校第３学年，義務教育学校後期課程第３学年，中等教育学校第３学年，特別支援学校中等部第３学年の児童生徒を対象に実施された。本県の調査実施校は，公立小学校 809 校，公立中学校 386 校，合計 1,195 校（特別支援学校を含む）であった。

1　調査内容

⑴教科に関する調査

国語，算数・数学は，主として「知識」に関するＡ問題と，主として「活用」に関するＢ問題とに分けて出題された。

⑵生活習慣や学習環境についての調査

児童生徒に対する質問紙調査と学校に対する質問紙調査が実施された。

2　分析と課題

⑴教科に関する調査結果

＜小学校＞	千葉県	全国
国語Ａ（知識）	73	73
国語Ｂ（活用）	58	58
算数Ａ（知識）	77	78
算数Ｂ（活用）	47	47
＜中学校＞	千葉県	全国
国語Ａ（知識）	76	76
国語Ｂ（活用）	67	67
数学Ａ（知識）	60	62
数学Ｂ（活用）	43	44

※数値は平均正答率（％）です。ただし，小数第１位を四捨五入しています。

㋐　国語の調査結果から

小学校では，Ｂ問題に改善が見られ，全国と同程度であった。「記述式」の正答率は，今年度も全国を下回ったが，上昇傾向が見られる。しかし，無解答率が全国より高い設問が多く，継続した課題である。中学校では，昨年度課題として挙げられた「記述式」が，今年度，全国と同程度まで回復し，改善が見られた。

㋑　算数・数学の調査結果から

算数では，Ａ，Ｂ問題ともに全国と同程度であるが，低下傾向にあり，「図形」の領域で課題が見られる。数学では，Ａ，Ｂ問題ともに全国を下回る状況である。特に「資料の活用」の領域で全国を大きく下回り，継続した課題となっている。「記述式」の問題形式では，算数，数学ともに，無解答率が全国より高い設問があり，課題として挙げられる。

⑵生活習慣や学習環境についての調査結果

㋐　児童生徒に対する質問紙調査から

「家庭で計画を立てて学習している」，「復習をしている」児童生徒の割合は，全国平均を下回っており，継続した課題である。また，勉強時間が長い児童生徒ほど正答率が高い傾向が見られ，小学校では，全く勉強しない児童との差が大きくひらいた。また，「主体的・対話的で深い学びに関する項目」では，その学習に積極的に取り組む児童生徒ほど正答率が高い傾向が見られた。

㋑　学校に対する質問紙調査から

小・中学校ともに，家庭学習を促す働きかけを行っている割合は，全国をやや下回り，課題を与えている割合は，中学校では全国を大きく下回った。家庭学習の課題の与え方について共通理解を図っている割合と，家庭での学習方法等を教えている割合については，小・中学校ともに，全国を下回るものの，やや改善傾向が見られた。

千葉教育　菜（No.６４２）　平成２９年１月３０日発行
編集・発行　千葉県総合教育センター　（代表）安　藤　久　彦
〒 261-0014 千葉市美浜区若葉２－１３　ＴＥＬ０４３－２７６－１２０４
ＵＲＬ　http://www.ice.or.jp/nc
印　刷　所　株式会社白樺写真工芸
〒 263-0002 千葉市稲毛区山王町１０２－５　ＴＥＬ０４３－４２３－１１０１